ふるさと探訪

第一部・猿橋物語

<8>

〝3代の渡り初め、今から楽しみに〟

明治の生き証人

おびただしい数の人間が汗を流した嘉永の猿橋は、明治維新をはさんで明治三十年代まで半世紀近い命脈を保った。それまでの橋が二十年前後の間隔で架け替えられてきた歴史を考えれば、大変に〝長寿〟だったことがうかがえる。

しかし、この〝江戸の遺産〟も時代の波には勝てなかった。日清戦争後の交通量の増加、とりわけ北富士の演習場へ向かう軍用車両の通行に、人馬の時代の橋は耐えられなかったのだろう。明治三十三年に架け替えが行われた。

この時の関係者は、もう世にいないし、なぜか詳しい架け替えの記録も残っていない。そんな中で、子供心ながら当時の工事の模様を見聞きした〝生き証人〟がいる。

北野光善（みつよし）さん。明治二十五年、猿橋生まれの八十九歳。左官職の仕事もやめ、隠居の身だが、いまも地元心月寺の名誉総代をつとめるなど、カクシャクたるものだ。

そのジイちゃんが語る。

架け替えの記録 ❸

「甲州街道からちょっと入った空き地（現在の猿橋出張所付近）に大人三人で抱えるくらいのケヤキ三本があっての。架け替え工事のためだろうが、一本を切り倒したら、その晩に大火があって町の中心部があらかた燃えてしまった。縁起が悪いっちゅうんで、そのケヤキは使わずにころがしてあった」

まだ当時は、街道筋や近在の山からケヤキ材が豊富に出たらしい。神宮が先頭に立ち、土車（木の輪に心棒を通したもの）に積まれた大木が街道を運ばれていく光景を、まだ小学生だったジイちゃんはよくおぼえている。

町の人たちを驚かしたのは、解体された前の橋（嘉永の橋）の古材だった。

「えらく太かった。近所の橋屋が払い下げてもらってな、タライを作ったなんて話もあった」

ともあれ、明治、終戦直後、そして今回と、三度の架け替えにぶつかった人は、もうジイちゃんくらいしかいない。

いまの計画では、新しい猿橋が完成するのは二年後の五十九年春になる。「ジイちゃん、それまではがんばってね」。近ごろは会う人、会う人からそんな励ましを受ける。

「うん、もう一度猿橋を見たいもんだ」。ジイちゃんの心は、晴れがましい〝三代の渡り初め〟に飛んでいるようだ。

新しい猿橋を心待ちする〝ジイちゃん〟こと北野さん